

日本民謡の地域性研究に向けての試論

——日本民謡の日本海側と瀬戸内海側——

小島 美子

-
- | | |
|--------------------------|-------------------|
| 1. テーマ | 4. 島根県の民謡の音階 |
| 2. 方法と資料 | 5. 広島県の民謡の音階 |
| 3. 山口県の民謡の長州と周防の音階分布上の相異 | 6. 核音の不明確なメロディの存在 |
| | 7. 2種の音階分布相異の意味 |
-

論文要旨

日本民謡には、一般に西物と東物の違いがあるといわれているが、私は以前に山口県と秋田県の民謡を例として、『日本民謡大観』所載の民謡を分析し、音階や旋律法などいろいろな点でこの2つにはやはり大きな違いがあることを明らかにした。

本稿では、県全体としては西物の特徴をもつ山口県の民謡を、さらに日本海側の長州地方、瀬戸内海側の周防地方に分けて同じ資料を集計し直し、日本海側と瀬戸内海側では違いがないかどうかを調べてみた。その場合、前論文でもっとも鮮やかな違いが現われた音階を本稿ではとり上げた。資料の多少や、民謡の種類による音階の偏りなど、偶然的要因を考慮しても、なお違いがはっきりしていたからである。

その結果、長州では周防よりも民謡音階がかなり大きい割合を占めることがわかった。そのため日本海側に隣接する島根県と、瀬戸内海側に隣接する広島県の民謡の音階を分析してみた。その結果、島根県の民謡は圧倒的に民謡音階の世界であることが明らかになった。とくに島根県の東半分にあたる出雲では、秋田県を超えるほどの高い比率で民謡音階が現われた。これに対して広島県側では、民謡音階の曲が約半数あり、律音階系の曲（律音階とその変種、都節音階とその変種を含む）が残り半分を占めていた。やはり日本海側と瀬戸内海側では大きな差が現われたわけである。

これらの結果をいささか飛躍して、音階が比較的変わり難い要素であることを考え、日本音楽の起源の問題にまで広げて考えてみると、民謡音階の民謡を歌っていた人々は、日本海側の地に入り、そのまま瀬戸内海側に進むのではなく、東に進んだ可能性も考えられるし、日本海側には継続的に民謡音階の刺激があった可能性なども考えられるのではないかと思われる。

またこれらの音階分析の過程で、核音とテトラコードの存在が不明確な例が約20曲現われた。このような形はこれまでもまったくなかったわけではないが、この場合のようにまとまって現われた例は珍しく、今後音階上の問題として検討する必要があるだろう。

1. テーマ

日本民謡には大きく分けて西物と東物があるといわれている。とくに職業的な民謡歌手たちを中心とした、いわゆる民謡界では、これは常識である。しかしその違いはどこにあるのか、また西物と東物の境界線がどこにあるのかなど、この2つの類型に関する音楽学的研究は、これまでほとんどなかった。そのため拙稿「民謡の類型研究に向けての試論——日本民謡の東と西、秋田県と山口県を例として——」⁽¹⁾（以下前論文と略称）では、秋田県と山口県の民謡を例に、音階、ことばの拍とメロディの拍の対応関係、メロディの形の3点について、『日本民謡大観』所載の民謡を資料として比較研究を行ってみた。その結果、秋田民謡は圧倒的に民謡音階の世界であり、これに対して山口県の民謡では、民謡音階が約半分を占めているものの、律音階や律音階の変種、またそれらから派生した都節音階や都節音階の変種も合計すれば、その残りの半分近くに達することがわかり、こうしてまず音階の上で大きな違いがあることが明らかになった。また、ことばの拍とメロディの拍の対応関係についていえば、秋田県の民謡では、追分タイプの自由にのぼして歌う形の民謡が67.0%を占めたのに対して、山口県の民謡では、そのタイプは40.1%にとどまり、この点でもかなりの違いがあることがわかった。さらに秋田県の民謡では、音階音そのままを順次に上行していき、頂点に達するとまた順次に下ってくる形を基本とする上行下行形の旋律のタイプが57.5%を占めるのに対して、山口県の民謡では、このタイプは41.3%にとどまり、逆に波形の旋律線が、秋田県では9.4%に過ぎないのに、山口県の民謡では30.3%もあることがわかった。こうしてこれらの点から東日本の民謡に対して西日本の民謡が、比較的単純な唱歌風のメロディに似て聞こえる理由の一端が明らかになった。

ただこの比較の過程で気にかかる問題が1つあった。それは山口県の日本海側と瀬戸内海側の民謡には、以上のような点でも違いがあるのではないかということである。実は西物の例として山口県を選んだのも、他の県を選んだ場合には、その日本海側と瀬戸内海側の違いが影響して、西物の特徴を見失わせる結果になるかも知れないと考えたからであった。したがってその両側の違いがあるのかどうか、やはり調べてみる必要があるし、その違いがあるとすれば、どんな違いなのか、何故そういう違いが現われるのか、などについて考えてみる必要がある。その比較を行ったのが本稿である。その意味でこの論稿は、前論文の続篇とあってよい。ただし本稿では、前論文でとり上げた3つの問題点のうち、もっとも鮮やかに違いが現われた音階についてのみ考察した。この方法で他の要素や他の地域にも考察を広げたいと考えている。その意味で本稿は実質的にはこの試論の（その1）としての性質をもつ。

2. 方法と資料

この論稿では、分析方法も資料もほとんど前論文と同じ形をとっている。くわしくは前論文を参照されたいが、簡単に述べておくと、まず第1に資料としては、日本放送協会編の『日本民謡大観』中国篇⁽²⁾を用いる。本来ならば録音資料に拠るべきだが、現在この『日本民謡大観』に集められた資料ほど多くの録音資料は、まだどこからも公開されていない。またこの『日本民謡大観』は、民謡のもっともオリジナルな形の歌をもとに採譜しており、採譜も比較的問題が少なく、現在全国的な民謡の資料としては、もっとも信頼のおける資料である。

ただし楽譜資料は無拍のリズム、つまり追分様式の歌のリズムは、採譜の仕方によって大きく変化する可能性がある。また小ぶしやゆりなど装飾的な音の動きも、採譜では採譜者の判断で省略される場合も少なくない。もともと追分様式のリズムも装飾的な音の動きも、多分に即興的な面があり、楽譜資料だけによってそれらを論じるのは問題が多い。民謡の東物と西物を問題にする場合、むしろそれらの特徴がよく現われるであろうと予想されたこの2つの問題をとり上げなかったのは、そのためである。

第2に、まず前論文で分析した山口県の民謡を、日本海側と瀬戸内海側に分けて集計し直してみる。その場合、長州地方を日本海側に、周防地方を瀬戸内海側として設定する。さまざまな歴史的な、あるいは社会経済的な要因なども考え合わせると、旧国の境界によって分けるのが適切だと思われるからである。また『日本民謡大観』も、この境界を重要視したようで、1曲ごとに旧国名を明示している。

第3に、長州と周防の民謡の分析結果を集計し直して、大きな差が出てきた場合、隣接する日本海側の島根県と、瀬戸内海側の広島県の民謡の分析を行って、問題点を検証してみたい。その場合、島根県は石見と出雲、広島県は安芸と備後をやはり一応分けて集計し、そこに一定の傾向性が現われるかどうかを調べてみる。

大体このような手順で本稿では分析を進めることにする。

3. 山口県の民謡の長州と周防の音階分布上の相異

すでに述べたように、山口県の民謡は秋田県の民謡に比べると、民謡音階の曲が少なく、律音階系の曲がその分だけ多かった。しかしこれは山口県全体に共通に見られる傾向なのか、日本海側と瀬戸内海側とは異なった傾向が現われるのだろうか。

これを調べるために、前述のような理由で山口県の民謡を長州と周防の2つの地域に分けて、音階の分析結果を集計し直してみた。音階の種類は、前論文と同じように、基本的には民謡音

階、律音階、律音階の変種、都節音階、都節音階の変種の5種類が現われる可能性がある。さらに民謡音階に律音階的な要素が混じっていると考えられる場合とか、律音階のメロディで、一部の中間音が下がって都節音階化しているものなど、中間的な形もいろいろ出てくる可能性がある。これらの中間的な形をどう判断するかについては、多くの問題があるが、今回再検討して、たとえば1曲の全体構造が基本的に民謡音階でありながら、部分的に律音階的なメロディの動きが見られる場合は、まず基本的には民謡音階の範囲とし、その中で律音階が混入した形(表では律混と表示)とするという分析基準を徹底して再整理してみた。その結果、前論文とは数値の上で多少誤差が現われた項目がでてきた。しかし前論文と本稿で論じる問題については、その誤差はほとんど影響はないと考えられる。

表1に、長州と周防の民謡の音階の分析結果の集計を掲げる。その結果、おもしろいことに周防では、民謡音階系とその他の律音階系、都節音階系(これらを変種も含めて以下律音階系と略称)の曲が、まったく50%ずつに分かれてしまった。これに対して長州は民謡音階系の曲が、61.5%と多くなっている。もちろんこれらの集計は収録曲数や、曲の種類による音階の偏りなどの諸条件を無視しての単純計算である。それでそれらの条件を考慮してみると、まず長

表1 音階の種類・山口県の民謡

	長 州		周 防		山 口 全 体	
	曲 数	%	曲 数	%	曲 数	%
民謡音階(純)	27	41.5	30	33.3	57	36.8
〃 (律混)	7	10.8	13	14.4	20	12.9
〃 (律変混)	3	4.6	1	1.1	4	2.6
〃 (一時的転調)	3	4.6	1	1.1	4	2.6
小 計	40	61.5	45	50.0	85	54.8
律音階(純)	3	4.6	13	14.4	16	10.3
〃 (民混)	2	3.1	8	8.9	10	6.5
〃 (都混)	3	4.6	3	3.3	6	3.9
小 計	8	12.3	24	26.7	32	20.7
律音階変種(純)	6	9.2	4	4.4	10	6.5
〃 (民混)	1	1.5	3	3.3	4	2.6
〃 (都混)			1	1.1	1	0.6
小 計	7	10.7	8	8.9	15	9.7
都節音階変種(純)	2	3.1	2	2.2	4	2.6
都節音階(純)	6	9.2	6	6.7	12	7.7
〃 (律混)	2	3.1	3	3.3	5	3.2
〃 (民混)	0		2	2.2	2	1.3
小 計	8	12.3	11	12.2	19	12.2
合 計	65		90		155	

州の民謡は65曲あるが、そのうち律音階系のパーセンテージを高くさせているのは、とくに盆踊りの曲である。長州の盆踊りの曲は9曲掲載されているが、そのうち民謡音階系の曲は2曲に過ぎない。つまり律音階系の曲25曲のうち7曲が盆踊りの歌である。この盆踊りの歌は、「さんさ時雨」や「思案橋」や「くどき」など、全国的に流行した歌が長州でも歌われて盆踊りの歌になったということである。つまり長州の人々が喜んで受け入れた歌ではあるが、長州の民謡としては古い歴史をもつ本来的な歌ではないということも確かである。もしその意味で盆踊りの曲を度外視すれば、民謡音階の比率はさらに高くなる。長州の民謡音階系の歌の61.5%は、秋田の83.5%と比べると、まだ低い、少なくとも周防の歌の50%に比べれば、大分高い。つまり日本海側の方が東日本の民謡につながる可能性が出てきたと考えることができる。(なお表の%は小数点以下2桁で4捨5入したため、小計で誤差のある場合がある。)

4. 鳥根県の民謡の音階

すでにふれたように、鳥根県は石見と出雲の両地域に分けて考えるが、さらに旧国としては隠岐も加えねばならない。表2は鳥根県の民謡の音階分析の結果であるが、やはり民謡音階系のパーセンテージが高くなっている。ただ驚いたのは、石見と出雲の比率の歴然たる違いである。山口県の長州と周防は日本海側と瀬戸内海側の違いだったが、石見と出雲は、もちろん両方とも日本海に面しており、いうまでもなく鳥根県の西半分が石見、東半分が出雲である。その出雲の民謡の民謡音階の比率の84.9%という数値は、秋田県全体の83.5%さえ超えているのである。

ところでこの音階の種類を、もう少しこまかく見てみると、驚いたことに出雲の場合は、純粋な律音階と律音階の変種が1曲ずつで、純粋な都節音階とその変種の曲はない。ただし律音階系で一部都節音階化している3曲は、本来は律音階のメロディと考えられるので、それを純粋の律音階系の曲に含めて考えても、合計5曲が純粋の律音階系の曲ということになる。ところがその5曲のうち2曲はおそらく他所から入ってきたと思われる祝い歌の「若松様」と「伊勢音頭」であり、他の2曲は例によって盆踊り歌である。残り1曲が地形歌であるが、これも他所から入った歌の可能性が高い。さらに、律音階に民謡音階風の要素が混じっていると考えられる3曲は、味噌搦き歌2曲と祝い歌の大黒歌であり、これまた職人や芸人が他所から伝えた可能性が高い。こう考えてみると、出雲地方の本来の民謡は、まさにまったく民謡音階の世界ということができる。

こうなると、隣接する鳥根県の民謡を始め、日本海側の民謡をできる限り分析して、この民謡音階の高い比率が秋田県まで切れめなく続くのかどうか、調べてみる必要が出てきた。またもし多少の濃淡はあるにしても、本州の太平洋側に対して、日本海側の民謡に圧倒的に民謡音

表2 音階の種類・島根県の民謡

	石 見		出 雲		隠 岐		島 根 全 体	
	曲 数	%	曲 数	%	曲 数	%	曲 数	%
民謡音階(純)	57	58.2	37	69.8	15	68.2	109	63.0
〃 (律混)	7	7.1	3	5.7			10	5.8
〃 (律変混)	1	1.0	1	1.9			2	1.2
〃 (一時的転調)	2	2.0	4	7.5	1	4.5	7	4.2
〃 (都混)	2	2.0					2	1.2
小 計	69	70.4	45	84.9	16	72.7	130	75.1
律音階(純)	14	14.3	1	1.9	2	9.1	17	9.8
〃 (民混)	3	3.1	3	5.7	2	9.1	8	4.6
〃 (都混)	4	4.1	3	5.7			7	4.0
小 計	21	21.4	7	13.2	4	18.2	32	18.5
律音階変種(純)	3	3.1	1	1.9	1	4.5	5	2.9
〃 (民混)	1	1.0					1	0.6
〃 (都混)								
小 計	4	4.1	1	1.9	1	4.5	6	3.5
都節音階変種(純)								
都節音階(純)	1	1.0			1	4.5	2	1.2
〃 (律混)	2	2.0					2	1.2
〃 (民混)	1	1.0					1	0.6
小 計	4	4.1			1	4.5	5	2.9
合 計	98		53		22		173	

階が多いということになれば、そこから多くの問題が派生してくる。それについては、最後にふれたい。

私は、音階の種類は1つの民族、あるいは1つの地域集団に、もとは1つしかなかったのではないかと考えている。ここではその根拠を詳しく説明する余裕はないが、沖縄県の宮古島の1例だけ簡単に紹介しておこう。宮古島には⁽³⁾ひじょうに古い歴史をもつと考えられる神歌が多数伝えられているが、その大部分の旋律は、律音階またはその変種である。ところがその神歌の歌詞の中に、八重山や首里の話が歌われたり、初めて宮古島に井戸が掘られた話が出てきたりすると、それらの歌だけは沖縄音階になるのである。つまり異文化に接したときに音階の種類が増えるということ、この例ははっきりと物語っている。

そして、このようにして音階の種類の数はいつでも多くなる可能性をもっているが、その場合に、余程大きい力が加わらない限り、以前からあった音階がすっかり姿を消してしまうということは、きわめて少ないと考えられる。これまで私が知る限りでは、少なくとも新しい音階に混入した形で古い形が残っているのが普通である。そうした例に照らし合わせると、1つの

音階が生き続ける時間は大変に長いらしいということが考えられる。私たちが日本の民族や文化の起源について音階の側からアプローチする際に、民俗音楽における音階の分布を1つのメルクマールにしているのも、それを根拠にしているのである。

こうして考えてみると、出雲地方の民謡が圧倒的に民謡音階の世界であるということは、やはり大きい意味をもつ。出雲地方が他所に対してとくに閉鎖的であるとか、孤立しているなどということは考えられないから、この地方の民謡音階はもともと相当強い力をもっていたのだろうと考えられる。

しかし石見地方もくわしく見てみると、律音階系の曲が多く現われているのは、囃し田の田植え歌と盆踊り歌である。盆踊り歌はすでに述べたとおり、各時代の流行歌の影響を受け易い種類であるから、律音階の曲が多いのは当然である。ただ囃し田の田植え歌の場合は、普通の民謡と同列に扱っていいかどうか、問題はある。囃し田の起源については、まだ芸能史学の分野でも論争中で定説はないが、少なくとも最初の発生時に、職業的な芸人が加わっていた可能性は高い。また『日本民謡大観』には、囃し田の笛のパートもかなり採譜されているが、それには律音階がきわめて多い。同時に歌われている田植え歌が民謡音階であっても、笛は律音階のメロディであるという形も見られ、囃し田の田植え歌はもともと律音階の曲が多かったのではないかと考えられる。また広島県では囃し田がきわめて盛んであり、安芸と備後では囃し田の様式に異なった部分がいろいろ見られるが、石見の囃し田は、安芸系の囃し田の影響下にある。そして後に見るように、安芸系の囃し田の田植え歌には、律音階系の歌が半数以上あるので、石見の囃し田の田植え歌に律音階が多いのは、その影響によるとも考えられる。

これらのことを考えると、石見地方の民謡もやはり民謡音階の世界であるといってもいい過ぎではないだろう。つまり島根県全体の民謡が、基本的に民謡音階の世界といい得るわけである。

5. 広島県の民謡の音階

さて広島県の民謡も、前述のようにまず安芸と備後の2地方に分けて考えてみよう。まず表3の安芸であるが、民謡音階系の曲がちょうど50%である。ということは、西に隣接する周防の場合とまったく同じ比率であり、しかもそれが50%という数値であるから、思わず笑い出したくなる程、意図的に仕組んだような結果であるが、これはもちろんまったくの偶然である。『日本民謡大観』の民謡の収録数は、他の民謡集に比べればはるかに多いが、実際の民謡に比べれば、これはおそらく何百分の1くらいにしかならないのであるから、これだけの収録曲では当然偶然的な要因も働く。また収録曲数も、地域や民謡の種類などバラツキも多く、もちろん偶然的な要因が多く働いているのは考えねばならない。しかしそれにしてもこの数字は、周

表3 音階の種類・広島県の民謡

	安		芸		備		後		広島全体	
	曲数	%	曲数	%	曲数	%	曲数	%	曲数	%
民謡音階(純)	90	46.9	57	47.1	147	47.0				
" (律混)	4	2.1	7	5.8	11	3.5				
" (律変混)	2	1.0			2	0.6				
" (一時的転調)			3	2.5	3	1.0				
小計	96	50.0	67	55.4	163	52.0				
律音階(純)	52	27.1	28	23.1	80	25.6				
" (民混)	11	5.7	9	7.4	20	6.4				
" (都混)	11	5.7	4	3.3	15	4.8				
小計	74	38.5	41	33.9	115	36.7				
律音階変種(純)	7	3.6	4	3.3	11	3.5				
" (民混)	2	1.0	2	1.6	4	1.3				
" (都混)	2	1.0	1	0.8	3	1.0				
小計	11	5.7	7	5.8	18	5.8				
都節音階変種(純)	3	1.6			3	1.0				
都節音階(純)	7	3.6	5	4.1	12	3.8				
" (律混)	1	0.5	1	0.8	2	0.6				
" (民混)										
小計	8	4.2	6	4.9	14	4.5				
合計	192		121		313					

防と安芸が、民俗音楽的にかなり共通のものがあるのだろうということを暗示しているようにも思われる。

ただ広島県の場合、この『日本民謡大観』の民謡の収録数はきわめて多く313曲もある。これは他の県の約2倍である。そしてそのうち囃し田の田植歌と盆踊り歌の収録数がとくに多い。囃し田の場合は、何種類もの田植歌が歌われるので、とくに多くの曲数を収録することになるのだろうが、安芸地方だけで41曲も収録されている。そしてそのうち民謡音階系は13曲であるから、安芸地方全体の歌の民謡音階の比率よりはるかに少ない。また盆踊り歌も35曲も収録されているが、その中で民謡音階系の曲は10曲しかない。これもやはりひじょうに少なく、この2種類の歌の収録数によって、民謡音階の占める割合は変わってきそうである。ただ安芸地方は収録曲数が192曲もあり山口県や島根県全体の収録曲数よりも多いので、多少その率は緩和されているとは思われる。

一方、備後地方は多少民謡音階の占める割合が多くなっている。ただ備後地方の場合は、囃し田の田植歌が27曲収録されているうち、民謡音階は16曲もあり、明らかに安芸系の囃し田とは違って高い割合を占めている。そしてかえって田の草取り歌や麦の草取り歌など麦関係の仕

事歌、石刀節など鉾山の歌、それから例によって盆踊り歌などに、律音階の曲が多い。とくに田の草取り歌や麦の仕事歌などは、比較的その地域の民謡のベーシックな音楽感覚を反映するような種類の歌であり、その意味で注目される。つまり備後地方の民謡は、表3に示しているように、安芸地方よりも民謡音階の占める割合はやや多いが、島根県における石見と出雲の違いほど鮮やかではないということである。さらに律音階系のパーセンテージをくわしく見ると、むしろ安芸と備後は、多少の傾向性は見られるものの、ほとんど共通の性格をもつと考えた方が無難である。


そしてここで問題とすべき大切な問題は、島根県全体と広島県全体の民謡の音階の比較である。島根県全体として民謡音階の占める割合は、75.1%に達するのに対して、広島県全体では52.0%である。これはさまざまな偶然的な要因を考えてもやはり大きい違いである。さらにすでに述べたように、島根県全体が民謡音階の世界だとすれば、広島県全体は民謡音階系と律音階系の民謡が半ばしている世界と考えねばならない。とくに安芸地方の民謡をもう一度くわしく見てみると、茶作り、みかん作りや機織りなどの諸職の歌、また木挽き歌や馬子歌や舟歌など、よく旅する人々の歌に民謡音階が多い。その意味では広島県全体として、むしろベーシックなのは律音階系であるといってもよさそうである。そのうち律音階の変種の占める割合は大変少ないが、この変種が現われている種類には、安芸でも備後でも田植歌もあり、とくに安芸では代掻き歌にもあり、変種も簡単に無視することはできない。やはり律音階と律音階の変種は今後とも一応区別して検討していく必要があるだろうと思われる。

6. 核音の不明確なメロディの存在

今回本稿のために、島根県と広島県の500曲近い民謡の音階を分析してみたわけだが、民謡音階と律音階とその変種が入り混じっていて、基本的にどの音階に属すると考えるべきか、判

踏 鞆 唄 (上り唄=籠り唄) 備後国比婆郡比和町森脇

林源一 白川豊一(放) 昭13.6.12



『日本民謡大観』中国篇より

断に苦しむ例が20曲近くあった。その中には譜のように、ほとんどフレーズごとに終わりの音が変わり、またメロディの中心的な音がどれなのか不明確なものがあった。この曲の場合は一応は基本的には律音階とみなしておいたが、それについては自分でも必ずしも完全に納得しているわけではなく、多少の不安を残している。

日本の伝統音楽のメロディでは、小泉文夫氏が早く指摘したように、ほとんどの場合、核音の機能が明確で、その核音の存在が完全4度の枠をもっているところから、小泉氏はテトラコルドの理論を組立てられた。その理論は部分的な修正や展開はあり得るが、基本的には訂正の必要がないと私は考えており、本稿でも前論文でもその理論によって音階の分析を行ってきた。

もちろん、核音の存在が不明確で音階の種類の判別に苦しんだ例は他にもいろいろあった。しかしそれらの例はほとんど1曲だけとかごく少数の例が散発的に現われるのが普通である。ただ沖縄本島の古い神歌には、核音やテトラコルドの存在が明らかでなく、簡単には音階の種類を判断できない例が、グループで現われた。その多くを私は、もともとベースに律音階の変種のメロディがあり、その上に沖縄音階が入ってきたため、もとのメロディが性格の強い沖縄音階の影響を受けて変質してきた過渡的な形であると解釈した。⁽⁵⁾ その場合、私の理論構築の実際的なきっかけとなったものは、明治以降洋楽が日本に入ってきて受容されていく過程で、音階上のさまざまな過渡的な形が、演歌師の演歌、流行歌、わらべ歌などに現われているということである。しかしもちろんその私の解釈には疑問をもつ人もあり、最近では金城厚氏が、沖縄の音階の中にはもともとテトラコルド構造ではなく、3度の積み重ね、あるいはペンタコルドの優勢な音階があったのではないかという説を発表されている。⁽⁶⁾ 私はもしそうした音階が存在したとしても、それがそのまま沖縄本島の古い神歌に適用できるかどうかについては、なおまだ検討を要すると考えているが、しかしこの金城氏の音階論の展開には大いに興味をもっている。

そして今回本土の民俗音楽でははじめて、核音とテトラコルドの存在の希薄な例が、ある程度グループで現われたのである。おそらく今回のように丹念に分析を進めていけば、こうした例は他にもいろいろあるに違いない。それにしても今回のこれらの例をどう考えるべきであろうか。現在のところ私は一応、本来律音階、または律音階の変種のメロディだったものが、他所から入ってきた民謡音階の旋律の影響を受けて過渡的な不安定な形になっている状態と解釈している。律音階のメロディは現在の日本では不安定な場合が少なくなく、部分的に民謡のテトラコルドの影響を受けたり、一部の間音音が下がって都節音階化したりする例がしばしば見られるからである。ただ普通はそのような場合でも、メロディの基本的な骨組は大体そのまま残しているので、そうした判断が簡単にできるのである。

しかしこの場合には何故このように、フレーズによって終わりの音が変わったり、何もかもが不確定なように見えるのが問題である。もともとそういうテトラコルドや核音の存在が不

明確な音階が沖縄のように本土の民俗音楽にもあり得るのかどうか、問題を一応残しておきたいと思う。

7. 2種の音階分布相異の意味

以上に述べてきたように、山口県の長州地方と島根県、つまり日本海側と、山口県の周防地方と広島県、つまり瀬戸内海側の民謡の音階の分布には鮮やかに違いが現われた。これはどんな理由によるものなのか、また日本の民俗音楽について考える場合にこの相異はどんな意味をもっているのだろうか。今回のこの資料だけで何か1つの仮説をたてることは危険ではないかとも思えるが、とりあえず現在の私の考え方を述べておきたいと思う。

まずすでにふれてきたように、一定の地域の人々のもつ音階感覚は意外に根強く、かなり変わり難いものである。もちろん不変ということではなく、異文化との接触、その人々の文化志向なども音階感覚が変わる強力な要因になり得るが、私の知る限りでは、そういう場合でも本来のものを簡単には捨てない。むしろ本来のものは持ちつづけて、異文化接触などによって持ち込まれた新しい音階を、その上に取り込んで、音階の数を増やし、音楽をゆたかにしていくのが普通である。もし後から入ってきた新しい音階が、それを持ち込んだ人々の強力な圧力、たとえば政治的、経済的、あるいは軍事的、文化的な圧力などによって、それ以前の文化を根こそぎ破壊するようなことがあったとしても、音階感覚はおそらく形を多少変えても、尾を曳きつづけるだろうと考えられる。たとえば日本近代の音楽教育では、1世紀にわたってヨーロッパ近代の音楽のみを、ほとんど100%に近い日本国民に、きわめて組織的に教え込んできたが、しかし今でも、子どもたちのわらべ歌も、おとなたちの物売りの声も、基本的な音階構造は、その100年前と変わっていないのである。

日本の歴史においては、これ程強力な組織的な全国民への音楽教育が行われたことは、かつてなかったわけだから、現在の民俗音楽に現われている音階感覚は、意外に日本人の本音を表わしており、歴史的にも相当古くまでさかのぼれるのではないかと想像できるのである。

その意味ではこの中国地方における日本海側と瀬戸内海側の音階文化圏（とりあえずこう呼んでおく）の違いは、ひじょうに古くから続いてきたと考えてもいいのではないだろうか。もちろん音階以外の要素についても、今後分析を試みる必要があると考えている。前論文で考察したことばの拍とメロディの拍の対応関係、旋律の形の2つの要素は、少なくとも山口県内の長州地方と周防地方に関する限り、集計し直しても音階ほど鮮やかな違いが現われなかったもので、今回はとり上げなかったが、これも音階とそれらの要素の結びつきは深いので、今後ぜひ検討してみなければならないと考えている。

ところでもし、この2つの音階文化圏の違いが、歴史的にひじょうに古い時点までさかのぼ

ることができるのであれば、日本文化の起源の問題にも、ふれていくことになるかも知れないと私は考えている。これまでまことに大ざっぱな見通しながら、私は一応、日本の音階の中でもっとも古層に属する音階は律音階とその変種であり、それはどちらかといえば中国や、より南の地域につながる可能性が大きく、さらにその上に、おそらくは朝鮮半島を通過して民謡音階がもたらされたと考えてきた。律音階とその変種は希薄ながら日本全国に分布しているのに対して、民謡音階は北海道から奄美諸島の徳之島まで分布している。そしてその南の沖永良部島以南には、やはり律音階とその変種のベースの上に沖縄音階が広がっているが、実はその民謡音階と沖縄音階も現在ではいろいろな形で交差しつつあると考えられる。

この大ざっぱな見通しにあえて今回の結果を沿わせて考えれば、北から朝鮮半島を通過してやってきた民謡音階をもった勢力は、主として日本海側から東へ向かっていったと考えることもできるわけである。もちろん日本海をめぐる人々の動きは、国境などはないのも同様に、いろいろと歴史的に続いてきたと想像されるわけで、その意味では、その長い交流の歴史が音階の分布にどのような影響を与えてきたかもこれから検討する必要があると思われる。

註

- (1) 『日本民俗研究大系』第1巻 国学院大学日本民俗研究大系編集委員会編 1991年
- (2) 『日本民謡大観』中国篇 日本放送協会編 日本放送出版協会 1969年
- (3) くわしくは小島美子「宮古島の神歌——その音楽史的発展——」(『芸能論纂』本田安次博士古稀記念会編 錦正社 1976年)参照
- (4) 小泉文夫『日本伝統音楽の研究』昭和33年 音楽之友社、とくにp. 114~117, p. 129~151
- (5) 小島美子「沖縄音楽の諸要素——ふたたび音階などについて——」(『沖縄——自然・文化・社会——』九学会連合沖縄調査委員会編 1976年 弘文堂)
- (6) 金城厚「琉球音階再考」『東洋音楽研究』第55号 1990年 東洋音楽学会

(国立歴史民俗博物館 民俗研究部)

Tentative Assumption for Regional Study of Japanese Folk Songs
—Japanese Folk Songs on the Japan Sea Side and the Inland Sea Side—

KOJIMA Tomiko

It is generally said that there are differences in Japanese folk songs between the western group and the eastern group. I have analyzed folk songs contained in the "Complete Collection of Japanese Folk songs", taking examples from the songs of Yamaguchi and Akita prefectures, and have clarified that there is a large difference between them in the scales and melodic.

In this paper, I have classified the folk songs of Yamaguchi prefecture, which have the characteristics of the western group as a whole, into those of the Chōshū region on the Japan Sea side and those of the Suō region on the Inland Sea side. I then collected the statistics of the two groups again to determine whether there was any difference between them. For the purpose of this study, I used the scale which showed the most distinct characteristic in my previous paper. The scales showed clear distinctions even after considering accidental factors, such as the volume of materials, and imbalance of scales according to the types of folk songs.

My results showed that the Minyō (folk song) scales accounted for a considerably larger part of the folk songs in the Chōshū region than the Suō region. I then analyzed the folk song of Shimane prefecture, adjacent to Yamaguchi prefecture on the Japan Sea side, and that of Hiroshima prefecture, adjacent on the Inland Sea side. The results showed that the Minyō scale is found in an overwhelmingly large part of the folk songs in Shimane prefecture. In particular, in the Izumo region, which corresponds to the eastern half of Shimane prefecture, the Minyō scales appeared with a very high ratio, almost exceeding that of Akita prefecture. On the other hand, in Hiroshima prefecture, the Minyō scales appeared in about half of the songs examined, and the Ritsu-type scales (including the Ritsu scale and its variations, and the Miyakobushi <capital city melody> scale and its variations) accounted for the remaining half. A large difference has been seen again between the Japan Sea side and the Inland Sea side.

Considering that the scale is an element rather difficult to change, and admitting

a certain extent of logic jumping with these results in considering the problem of the origin of Japanese music, the people who sang songs with the Minyō scale entered the country on the Japan Sea side, and instead of proceeding to the Inland Sea side, they possibly proceeded to the east. Or it is possible that there was a continuous flow of people who sang folk songs with the Minyō scale to the Japan Sea side.

Also in the process of this analysis, I found that the existence of nuclear notes and tetracords was not clear in about 20 pieces. Such examples existed elsewhere, but it was rare for them to appear in such a large number as in this case. This problem will require further discussion as to how it relates to the scales.